JAZZ LIFE interview (October, 2017 in Japan)
English translation is attached on next page

INTERVIEW 1stアルバム『ジャズ・トライアングル』リリース・インタヴュー

取材：松永誠一郎 photo by Akihiro Watanabe, Ken Saimyoji(+) 写真提供：ホウッド・ニュー

JAZZ TRIANGLE 65-77

ジャズ・トライアングル65-77

ニューヨークのクイーンズに住むフルート、アコースティック・ギター、ベース、3人の日本人アーティストによる室内楽ジャズ・プロジェクト＝ジャズ・トライアングル65-77。ファースト・アルバム『ジャズ・トライアングル』をリリースしたばかりのそのトリオが先日来日公演を果たした。来日の合間を縫って、結成の話、活動の話を中心にインタヴューに答えてもらった。

『ジャズ・トライアングル』
ジャズ・トライアングル65-77
ホウッド・ニュー
(What's New)
WNCJ-2277
発売中(3/8)

●収録曲● ①アービトレイション ②ウェイティング・フォー・スプリング ③ファイアー・バード ④ア・クイーン・オブ・ザ・ナイト/月下美人 ⑤インターブレイ ⑥パラレル・ワールズ ⑦ヴォカリーズ ⑧ストレンジャー・イン・パラダイス
●パーソネル● ジャズ・トライアングル(深沢晴奈(fl)、小田村慈(ac-gt)、山本章弘(b))
●録音● 2016年5月13、14日 千葉「GROOVE Studio」録音

3人が考える "メイド・イン・クイーンズ"の魅力

――まず、出会いと結成の経緯を教えてもらえますか？

山本章弘：(深沢)晴奈ちゃんとは、彼女がニューヨークを一度訪問した時に知り合いました。その後、彼女がクイーンズに引っ越してきて、僕のアパートの近所にあるカフェ「エスプレッソ77」で偶然再会したんです。それがそもそものきっかけですね。近所だし、いっしょにやろうとデュオのオリジナル曲をやり始めました。

深沢晴奈：「エスプレッソ77」のギグは、アメリカに住み始めてから初めてもらったレギュラーの仕事でした。アキくん(山本)と「エスプレッソ77」で会った時に「ここバンド演奏もやっているから、やらせてもらえるか聞いてみようよ」とふたりでオーナーに話しに行ったら、演奏させてもらえることになって。今でも月1回、ジャズ・トライアングル65-77で出演させてもらっていて、トリオでできないときは慈くん(小田村慈)とデュオでやったりもしています。

――山本さんと小田村さんとの出会いは？

山本：慈くんとは別のギグで何度か演奏していて、気になるミュージシャンではありました。たしか「トミ・ジャズ」だったかなと思いますが、ギグがあるからやってみようと。

小田村慈：そうですね。

山本：トリオになったのは2年前くらいです。3人でやり始めた時から、リーダーひとりがギグを引っ張っていく感じではなく、みんなが平等なスタンスでした。リハーサルをするときも、みんなで曲を出し合い、みんなでアレンジしていたら、なんとなく自分たちのカラーが出てくるのではないかと。多分僕がバンドとしてやろうと言ったのではないかな……。晴奈ちゃんとやっていたデュオの曲も3人でやるために単なるリードシートではなく、もっと複雑なものにアレンジし直しました。

――山本さんと小田村さんはニューヨーク生活はどのくらいなのですか？

小田村：僕は6年くらいです。

山本：僕はアメリカには18年いて、最初はロサンジェルスにいました。そこで大学を出て、10年ほど前にニュージャージーのウィリアムパターソン大学の大学院に入学して作曲とアレンジを勉強しました。クイーンズに引っ越してきたのは8年くらい前ですね。

――山本さんはもともとはギタリストだったそうですね。

山本：日本で高校にいた時からベースを弾いていて、西海岸でギターを習い始めたんです。大学はギターで卒業しましたし、ビッグバンドでもギターを弾いていました。大学院に行き始めた頃にギターよりもベースのほうが自分に合っているなと思い、二足のわらじはやめようと思いました。ずっとベースは弾いていましたが、その頃はクラシックや吹奏楽をやっていました。ベースだけだとメロディ・ラインが上手く弾けないし、コードや和音感やソロのラインなどはギターで勉強しました。ギターをやめようと決めた時には、そのアプローチがベースに活かせるようになっていたんです。

――3人の音楽性は皆さんが住んでいるクイーンズという土地の雰囲気からの影響もあるでしょうか。

山本：僕はもともとマンハッタンに住みたいと思わなかったし。

深沢：私は別にどこでもよかったです(笑)。

小田村：僕はマンハッタンは家賃が高いので、クイーンズしか住めなかったという(笑)。

山本：人種の割合としてアジア人もミックスしているのがクイーンズですね。

(+)

この3人にしかできないオーガニックなサウンドを目指している

深沢：結局、みんなマンハッタンやブルックリンに引っ越したいという気にならないということは、合っているということかもしれないね。

小田村：マンハッタンからクイーンズに電車が抜けると、人種が変わるというか。

――ふだんは「エスプレッソ77」以外でも演奏はしているのですか。

山本：「トミ・ジャズ」が一番多いかな。僕は月1回レギュラーでやらせてもらっているので、できるときはこの3人でやっています。

小田村：あとはチャーリー・バーカー(as)も演奏したことがあるという「アーサーズ・タバーン」、僕が週末でやっている「アナログ」という店もあります。

――ニューヨークの観客の反応はどうですか？

山本：小難しい音楽と思われたり、ドラムがないからインパクトないかなとこちらが心配するわりには、しっかりと聴いてくれてくださり、「いいね！」というコメントをよくもらいます。

小田村：アメリカに戻ったらブルーノート・ニューヨークのサンデー・ブランチにも出演するので、今回の日本ツアーでどのような成果が得られるか楽しみです。

ジャズ側からのクラシック的なアプローチ

――ドラムレスのメリットを感じたことはありますか。

山本：練習しやすい(笑)。

深沢：私はフルートという楽器なので、ドラムレスはいいなとも思います。音色的にシンバルが鳴ると音がかぶってしまいがちですので。

山本：ベースも攻めなくていいから。ドラムがいると負けないように弾かないといけないですが、ゆったり弾きたいと思った時にゆったりできるし、白玉をしっかり聴かせたいと思った時にもそうできます。また、曲の途中でテンポ変えるとか。

小田村：クラシックのチェンバー・ミュージックは、テンポを自由に変えたり、指揮者がいなくても阿吽の呼吸でできちゃうというのがあって。このバンドだったらそういう自由がききますね。

山本：ジェシ・ヴァン・ルーラー(g)のドラムレスのトリオが好きで、そんな感じのことがしたいなと影響受けたのはあるかもしれません。

――ニューヨークだけでなく、ヨーロッパでも受け入れられそうな印象です。

山本：自分たちでもそうじゃないかなと思っているので、来年はぜひヨーロッパに行きたいですね。

小田村：ニューヨークの音楽はいろいろなミュージシャンが世界から集まり、それぞれの国のグルーヴを持ち込んできてると思いますが、ヨーロッパは歴史があるからそんなに主張しないで一歩引いたところで音楽を主張できるかなと思います。

山本：ニューヨークにも日本人ミュージシャンたくさんいますが、この3人じゃなかったらできなかったとは思います。全員がクラシックの背景があり、ソロをゴリゴリとりたいという感じではないので。

――山本さんが一番クラシックに近いのでしょうか。

山本：たぶん演奏に関してはそうだと思います。

小田村：アキさんは呼吸の取り方が、グルーヴではなくメロディで取っているので。グルーヴだけでもハーモニーが流れているみたいな、そういうイメージを持っています。

山本：クラシック畑の人がジャズをやるとスウィングしないというのが恥ずかしいから、しっかりできるようにと。そこはジャズやっているプライドがあります。オーケストラでベースを弾いていましたから、オケでのベースの鳴らし方をこのトリオでしながら楽しんだりもしています。

――多彩なアプローチなので、3人なのに背景が豊かに見えるんですね。

山本：慈くんのギターがあるからこう弾いてもいいと思えるし、晴奈ちゃんが出したキューに合わせる自信もあります。

――3人でのインプロヴァイズについては、どのように考えていますか。

小田村：インプロといっても、コード進行に沿って即興で弾くだけではないと思うんです。メロディ・フェイクの延長線みたいなのもありだと思っていて。ガイドラインを書いておいて、自由に弾いてもらう。ハーモニー、メロディの下地をつくっていて、3割4割変えるとか。どこまでが書いてあって、どこからがインプロかわからないような、そんなサウンドがけっこう好きなんです。書き過ぎずに緩くしておいて、面白くするためにジャズの要素をふたりに入れてもらう。

山本：一般のジャズの演奏はやっているうちに自然に速くなってしまうことがあります。速くなると遅くするのは難しいんですが、このトリオでは平気で遅くします(笑)。

小田村：昔の歌伴のオーケストラなど、転調したら途端にテンポが速くなるとかあるじゃないですか。占い手法ですが、それをあえてやると面白いかなと、パロディ的な感じでやっているところもあります。

山本：クラシックっぽいけど、3人でインプロしてるよね。どういうテンポになるかわからないけど、やっちゃったみたいな。

――そう考えるとジャズですね、やはり。

小田村：オーガニックなサウンドを目指している感じかな。もともとクラシックも作曲者が曲を書いてピアノ弾いて指揮をするシンガー・ソングライターみたいな感じだったと思うんです。僕たちもそうやってパーソナルな部分を庶民的に出していければいいなと思います。

PROFILE 深沢晴奈 FLUTE

東京生まれ。12歳からフルートを始め、クラシックの活動を進める傍で、オスカー・ピーターソン(p)のライブを聴いてジャズに開眼。ロック・バンドなど、様々なバンドのサポートを経験。2009年からフランク・ウェズ(fl)に師事。2012年NYに拠点を移す。2010年に初リーダー作「スプリング・アップ」をリリース。

PROFILE 小田村慈 GUITAR

京都出身。2003年ギブソン・ジャズ・ギター・コンテスト審査員特別賞を受賞。2006年からパークリー音楽大学に進学し、ジャズ作曲賞を奪取。現在は、舞台や映画出演などの作曲をするなど、ギタリストに限定らない幅広い活動を続けている。2016年にソロ・アルバム「クラウド・イリュージョンズ」をリリース。

PROFILE 山本章弘 BASS

兵庫生まれ。カリフォルニア州立大学ノースリッジ校でジョン・ビサノ(g)にジャズ・ギターを、アレンジャーのマット・ハリス(p)からジャズ理論、ビッグバンド・アレンジを学んだ後、ウィリアム・パターソン大学でラム・マクニーリー(arr)などに師事して修士を取得した。現在は、自己効バンドThe Arch-tetの他、映画やテレビ番組に楽曲提供。

Interview on the Release of the First Album *The Jazz Triangle*

Photo credits: Akihiko Watanabe, Ken Saimyoji
Photos provided by What's New

Jazz Triangle 65-77

Jazz Triangle 65-77 is the name of the trio of three Japanese musicians based in Queens, New York that was formed to explore chamber jazz music with the flute, acoustic guitar, and bass. Right after they released their first album *The Jazz Triangle* they visited Japan and played shows. Despite their busy schedule they found time for an interview and talked about the formation and activity of the trio and various other subjects.

The Trio's Thoughts on the Fascination of "Made in Queens"

Interviewer: First of all, can you tell us about how you met each other and how the trio was formed?

Akihiro Yamamoto: I met Haruna when she visited New York. After a while, she moved to Queens, and we bumped into each other at Espresso 77 which is a cafe near my apartment. That was the beginning. We were like, "We live close to each other, so why don't we play together." and started to play our original duo pieces.

Haruna Fukazawa: The gig at Espresso 77 was my first regular job in the United States. When I bumped into Aki there, we were like, "Bands come play here, so we should ask if we could play, too." We then talked with the owner of the cafe, and he let us play there. We still play there once a month as Jazz Triangle 65-77. When we can't play as a trio I play duo with Shu.

Interviewer: How did Mr. Yamamoto and Odamura meet?

Yamamoto: I had played with Shu several times in different gigs, and he was one of the musicians who were on my radar. There was a gig at Tomi Jazz, if I remember correctly, and we said, "Let's play together."

Shu Odamura: That's right.

Yamamoto: We formed the trio about two years ago. Since the beginning, our approach has been that we are all equal. It's not like there is a leader who takes the lead in gigs. In rehearsals we often think that if we all contribute compositions and make arrangements together, our own color will somehow emerge. I think I was the one who suggested we form a trio. The duo pieces I played with Haruna didn't just become lead sheets for the trio. We arranged them and made them more complex.

Interviewer: How long have Mr. Yamamoto and Mr. Odamura lived in New York?

Odamura: I have been living there for about six years.

Yamamoto: I have been living in the United States for eighteen years. I lived in Los Angeles first, graduated from college there, and then went to graduate school at William Paterson University about ten years ago to study composition and arrangement. I moved to Queens about eight years ago.

Interviewer: Mr. Yamamoto, I heard that you were a guitarist at first.

Yamamoto: I was playing the bass when I was in high school in Japan and started learning the guitar when I was living in the West Coast. I graduated from college, specializing in the guitar. I also played the guitar in a big band. When I started in graduate school I thought the bass suited me better than the guitar, and that I shouldn't chase two rabbits. Actually, I had been playing the bass, but I was playing classical music and was also playing in a brass band. If I played only the bass, I found it difficult to play the melody line well. So, I used the guitar to study chords, harmonic feels, and solo lines. I was able to take advantage of this approach when I decided to choose the bass over the guitar.

Interviewer: Do you think that the musicality of you three is influenced by the vibe of your Queens neighborhood?

Yamamoto: I never wanted to live in Manhattan...

Fukazawa: I was fine with anywhere. (Laughs)

Odamura: Manhattan rents were too high for me, and Queens was the only place I could live. (Laughs)

Yamamoto: In terms of the racial composition, Queens has a good number of Asians.